

前方後円墳の名付け親 蒲生君平

宇都宮伝統文化連絡協議会長 柏村 祐司



蒲生君平勅政の碑



蒲生君平肖像画

国の政治体制が変わることによって

歴史上の人物の見方が変わることはよくある。その一人に我が故郷の偉人蒲生君平がいる。蒲生君平は、朱子学の名分論にもとづいて尊王思想を説き、天皇様を調査し「山稜志」をまとめたことで知られる。彼の活動は、尊王論の先駆けとなり、幕末の尊王運動に影響を与えたのであった。

明治新政府は、明治維新に貢献した人物を称えた。東武宇都宮線と不動前通り(旧日光街道)が交わる所に建立された「蒲生君平勅政碑」や県庁北側八幡山丘陵上に祀られた蒲生神社等は、蒲生君平を高く評価したことに他ならない。

ところが戦後政治体制が変わり、天皇の神格化が崩れ、戦前の政治体制に対する反動等もあいまって蒲生君平の見方が一変した。学校教育でもとりわけ取り上げられることもなく、宇都宮市民の関心も薄れた。蒲生君平は、誠に歴史に翻弄

された人物といえる。

蒲生君平は、明和五(一七六八)年新石町(現小幡一丁目)の油商兼農業を営んでいた福田又衛門正栄の四男として生まれた。幼名を伊三郎、実名を秀実、君平は字である。なお、本名は福田でありながら蒲生を名乗ったのは、十三歳の頃、祖母より福田家の先祖が戦国時代の武将蒲生氏郷につながることを聞かされたことによるという。蒲生氏郷の子秀行は、慶長三(一五九八)年宇都宮城主となったが、この時弟正行も重臣として加わってきた。この正行が生ませた子が福田家の先祖であったという。この話を聞いた君平は、発奮し学問で身を立てることを決心したともいう。

六歳の頃から近所の延命院住職良快和尚について読書、習字の手ほどきを受け、四書五経の素読を教えられた。十五歳の時、鹿沼の儒者鈴木石橋に師事、十七歳の頃石橋の

紹介で黒羽藩の鈴木武助を訪ねて為政の眼を開き、十八歳の時武助の紹介で水戸に赴き藤田幽谷と交わり学問の基礎を固めた。その年江戸へ出て、山本北山の塾に入り、高山彦九郎等の知己を得た。海防をはじめ時世の改革を唱え諸国を遊歴する。文化一〇(一八三三)年四六歳で江戸で没し、はじめ谷中の臨江寺に葬られ、のち、遺髪を宇都宮市の桂林寺に改葬した。

君平の功績の一つに、前述したように荒廃する天皇陵を探索し、その結果をまとめた「山稜志」がある。君平がこの山稜志でまとめた御陵の時代区分は、古墳の時代区分とし一時期考古学界で用いられ、また、今でも用いられている「前方後円墳」の名称は、君平が名付け親である。

ところで君平の死後五十年後、山稜志が思わぬことで役に立つことになった。幕末宇都宮藩は、坂下門外の変に関係者が出て窮地に陥った際に、打開策として、山稜志に基づいて山稜修補事業を実施した。これは時の公武合体政策に合致するものとして高く評価され、お陰でお咎めを受けることもなかった。山稜志は、宇都宮藩の窮地を救ったのであった。ひとえに蒲生君平のお陰でもあった。

二〇一三年は、蒲生君平の二百年忌である。これを期して蒲生君平の再評価が行われることを期待してやまない。